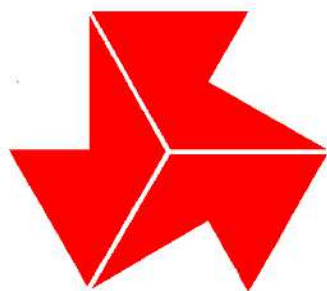


令和5年度  
第17回石川県高等学校体育連盟研究大会

# 研究紀要



主催 石川県高等学校体育連盟



## 令和5年度 第17回石川県高等学校体育連盟研究大会開催要項

- 1 目的 石川県高等学校体育連盟に加盟する各高等学校の体育・スポーツ指導者の資質向上を図るため、日頃の研究成果を発表するとともに、当面する諸問題について情報を交換し、高等学校教育の一環としての体育・スポーツの振興・発展に資する。
- 2 主催 石川県高等学校体育連盟
- 3 日時 令和5年11月28日（火） 13：45～15：45
- 4 会場 石川県青少年総合研修センター  
金沢市常盤町212-1 TEL 076-252-0666
- 5 参加対象 石川県高等学校体育連盟加盟校の体育・スポーツ指導者
- 6 研究主題 「新しい時代の部活動の多様性～SDGs すべての子どもたちに輝きを～」
- 7 内容 研究発表

### 発表テーマ1 競技力向上について

「自主的な練習ができる選手育成のためのプレイングコーチ」

発表者 自転車競技 専門部 内灘高等学校 片岡 信忠 教諭

### 発表テーマ2 健康と安全について

「ホッケー競技を安全に行うために～高校からの初心者指導～」

発表者 ホッケー 専門部 羽松高等学校 倉脇 寛支 教諭

### 発表テーマ3 部活動の活性化について

「持続可能な競技環境に向けて～高校生サッカー審判員育成を通して～」

発表者 サッカー 専門部 金沢西高等学校 上提 奨悟 教諭

## 8 日程

| 13:15 | 13:45 | 14:00～               | 15:30    | 15:45 |
|-------|-------|----------------------|----------|-------|
| 受付    | 開会式   | 研究<br>質疑<br>発表<br>応答 | 指導<br>助言 | 閉会式   |

## 自主的な練習ができる選手育成のためのプレイングコーチ

自転車競技専門部  
内灘高等学校 片岡 信忠

## 1 自転車競技の歴史

自転車競技の起源は、自転車が本格的に開発された 19 世紀中頃とされています。記録に残っているものでは、1868 年にパリで 1200m のレースが行われており、翌年には 2 都市間でのレースも行われました。1903 年には第 1 回ツール・ド・フランスが開催され、本格的な耐久レースが始まっています。また、トラックレースについても、19 世紀後半には世界選手権が開かれるなど、短距離から長距離まで、自転車の普及に合わせてさまざまな競技が生まれています。

日本においても、19 世紀後半に自転車の競技会が開かれています。日本に伝わってきた当初は、自転車は高級な物として扱われていましたが、普及が進むにつれて競技人口も増えています。現在では、日本自転車競技連盟が組織され、競技会の開催や、更なる普及のための活動を行っています。

自転車競技の歴史の中で大きく変化してきたことのひとつとして、機材の発達が挙げられます。初期の頃に見られた木製の自転車に比べると、現在はカーボンやアルミニウム合金を使用した、軽量にもかかわらず高い強度の自転車が主流になっています。機材の発達により、走行中のスピードは昔と比べると段違いに速くなりました。また、レースにおいても、単純にスピードを競っていた頃とは違い、現在では空気抵抗を考慮して、レース終盤まで前の走者の後ろについて体力を温存するなど、戦略性の高い展開を見ることが出来ます。

自転車競技は、大きくロードレースとトラックレースに分けられています。ロードレースでは、規制された一般道を使用することが多く、プロレースでは走行距離が数百キロにも及び、数日にかけて行われることもあります。トラックレースは、直線とバンクのついたカーブからなるトラックを周回するスピードを競います。短距離から長距離まで、また複数人で行う競技などさまざまです。

(\*SPAIA「スポーツ × AI × データ解析でスポーツの観方を変える」より引用・抜粋 <https://spaia.jp/column/cycling/2082>)

大別してトラック競技とロード競技があり、使用自転車が違う。それぞれの競技内でレース系種目とタイムトライアル系種目に分類される。また団体種目もあり、これはタイムトライアル系の種目になる。ロード競技は主に長距離になるが、トラック競技はおおまかに短距離（1 k m 以下）、中距離（1 ～ 8 k m）、長距離（8 k m 以上）に分類される。

## (1) トラック競技

- ①タイムトライアル系 男子…1km タイムトライアル、3 k m インディヴィデュアル・パーシュート  
女子…500m タイムトライアル、2 k m インディヴィデュアル・パーシュート  
団体…チーム・パーシュート、チームスプリント
- ②レース系種目…スプリント、ケイリン、ポイントレース、スクラッチ など

## (2) ロード競技

- ①タイムトライアル系 男女…個人ロードタイムトライアル（距離は大会により異なる）
- ②レース系 男女…個人ロードレース

## 2 石川県高体連自転車競技専門部の現状と課題

### (1) 石川県の現状

令和5年度現在で石川県内の自転車競技部が存在しているのは、内灘、松任の2校のみである。選手個人で活動している学校として、男子では、県立工業、金沢錦丘、女子では北陸学院、金沢市立工業である。選手総数は男子15名、女子4名、合計19名（令和5年8月末現在）の少数精鋭で活動しているのが現状である。また、前項で述べた種目については、本県ではトラック競技を中心に活動しており、石川県立自転車競技場に放課後、祝祭日に選手が集まり、所属校に関係なく男女合同でトレーニングを行っている。

### (2) 近年の全国大会の結果

2014年（平成26年）インターハイで内灘高校の男子ケイリン優勝からしばらくは全国大会での入賞はなかったが、2020年に全国高体連自転車競技専門部主催のインターハイ代替大会で、女子500mタイムトライアルで優勝（星稜）、男子チームスプリント8位（内灘）の入賞から、強化の成果が出始めてきた。

2020年度の選抜大会では女子スクラッチで5位（星稜）、男子1kmタイムトライアルで6位（内灘）で入賞した。

2021年インターハイでは、女子500mタイムトライアルで5位（内灘）に入賞し、同年度の選抜大会では、女子500mタイムトライアルで5位、6位（内灘）ケイリンで8位に入賞した。

2022年インターハイでは女子500mタイムトライアルで優勝と2位（内灘）、女子ケイリンで2位（内灘）、男子1kmタイムトライアルで8位（内灘）であった。2022年栃木国体では女子チームスプリントで優勝した。

2023年の大会結果は以下の通りである。

5月全日本選手権 女子ジュニア 500mタイムトライアル優勝、ケイリン優勝、スプリント優勝

8月インターハイ 男子1kmタイムトライアル 優勝

女子500mタイムトライアル 優勝

女子ケイリン 2位

### (3) 現在の課題

本専門部での部員不足が大きな問題となる。そのため、集団走行練習が行えないため、本県ではトラック競技のタイムトライアル種目を中心に強化を行なっている。選手の中では、レース系の種目に出場したい希望があったとしてもそれに対応した練習が行えず、またロード種目や長距離系種目を行いたい選手がいた場合でも、現状トラック練習中心となる。長距離系の種目の強化については、対応した指導者、サポート体制の不備があげられるため、基本各選手の自主練習でおこなっている。個人で練習を行う場合、選手個人でのメニュー作成、モチベーション維持が必要である。

自転車競技は通常では味わうことができないスピードを体感できる爽快感と引き換えに、危険がつきまとう。競技力向上だけでなく、自転車の安全な乗り方、走り方などの安全教育も必要である。ロード練習時には交通ルールをしっかりと守らせ、安全な練習をできる指導と機材トラブルのサポートなどスタッフの確保も大きな課題である。

### 3 強化についての方策

#### (1)自主性を促す指導方法

##### ①選手と一緒にトレーニングメニューを考える。

指導方法として、選手が指導者からメニューを言われたことを行うだけでは、選手自身の練習が単調になる。また、モチベーションが向上せず、指導者の顔色を見て練習の手を抜くなどがある。

そこで、選手自身に何について取り組んでいきたいか「テーマ」を考えさせ、その練習方法をこちらから提案する。バンクのコンディションを考慮しつつ、パワー系（出力強化、向かい風対策）にするのか、それともスピード系（最高速向上、回転力向上）にするか。またスタミナ強化のための持久力系か、競争系種目のためのスキル系（追い抜く、追走練習）かを選手の要望を聞き、指導者はメニュー作成し選手に提案する。セット数、強度も同様に選手と対話をしながら行う。しかし、入賞経験の少ない選手や勝利を知らない選手についてはメニュー強度が弱くなる傾向があるため、指導者は対話を通じてコントロールする。選手と一緒にメニューを組むことにより、選手の考えを肯定し、選手自身が責任と目的をもって練習に取り組む事ができる。また本日の練習全体が見通せるため選手は手を抜かず集中してセットをこなすことができるという効果があった。

##### ②自分の「強み」と「課題」は何か。それを「達成」するための方法について考えさせる。

入賞経験を積んだ選手に対し、今現在の「強み」と「課題」は何かを考えさせる。そして今現在の「強み」は何で、それを生かせる方法とはどうするのか。今現在の「課題」は何でそれを克服するためには何が足りないのかなど対話を通じて選手に投げかける。

やがて、成功体験を積んだ選手になると、積極的に自らメニューを組んで行くようになる。また、練習に対しても貪欲になり、選手側から新メニューを提案されることもあった。

選手自身が自らトレーニングをプロデュースし、また高負荷トレーニングを継続することで強化できる事を選手自ら体験し成功すると、より効果的な厳しいトレーニングメニューに対して集中して行う事ができるようになっていく。そこで指導者はあまりにも強度がきつい練習や疲労がたまりすぎていると判断できる場合は怪我のリスク等があるため、練習についてコントロールや制御、抑止する必要がある。

#### (2)プレイングコーチのメリットと役割

令和5年度は部員が増加したため、集団走行練習ができるようになってきたが、昨年度（令和4年）までは男子部員の総数が6名であったため、週末にしかできなかった。放課後練習では本校の部員が少ないため集団走行するための人数確保が難しかった。そこで私自身、過去に選手として走っていた経験を生かし、集団走行練習のための人員として練習に参加した。

現役選手と一緒に走行することにより、競技場（バンク）のコンディションがリアルタイムにわかる。具体的には風向き、強度、路面とタイヤの摩擦状態（バンクが重いか軽い）などである。同時に選手コンディションについてもアップの段階で調子が手に取るようにわかる。向かい風でしっかり踏めているか、いつもよりアベレージ、マックススピードが高いか低いかなどである。調子を最初に見ることができるため、アップ後にトレーニングメニュー変更も素早く行うことができる。

レース系の練習についても、一緒に走ることにより、前方選手の追い抜くタイミング、後方選手が来た

場合のスピードコントロールなどバイク（オートバイ）を使用した指導よりも、的確に指導できる。その他、先頭交代の走行方法、走行時のライン取り（どこを走るのか）など細かいことも見えてくるため、リアルタイムで助言ができる。助言は、走行後すぐに的確に行う事ができるため、よいプレー（走行）や危険走行についてはすぐに指導できるため効果が高くなるのが期待できる。

モチベーション向上のためには、指導者と選手のギア比を変え、指導者が不利になるようなハンディキャップを取り入れ、選手に勝利のチャンスを与える事により、選手自身がトレーニングの成果、走力の向上を体感させ、勝つ喜びをあたえるといったスパイスも与えることができる。

#### 4 今後の指導方法について…「指導者」目線と「選手」目線

指導者として3年間継続して見た選手がインターハイで優勝した事は今回が初めてであった。私自身も全国大会で表彰台に立ったことがあるが、その時の指導方法を今の時代に取り入れることは時代錯誤である。

高校卒業後も自転車競技を続けていきたいと考えている選手がさらに強くなっていくためには、自ら考え、自分の練習をしっかりと見つめ、厳しいメニューを粘り強く続け、さらに新しいトレーニング等でスキルを習得し自分のものにできるかどうかである。今回行ってきた指導方法で、彼らのさらなる成長につながればよいと考える。願いとして高校卒業後も活躍できる選手に成長することを期待している。

また、本校自転車競技部に所属したすべての選手が優勝することはできない。この自転車競技部での経験が人生の中で生かされ自ら考え、道を切り裂いていく力になればよいと思う。

私自身自転車に乗り高校生選手と一緒に走ることは、指導者という視点ではなく、「選手」としての視点がよみがえってきた。高校生選手に負けることは悔しく選手目線の考え方ができるのもよい点である。今回優勝した選手が1年生の時は勝つことができたが、やがては追い抜かれて成長していく姿を見ることは「指導者」としてはうれしく感じ、「選手」としては悔しいと感じる複雑な体験ができた。

今後は「指導者」として、絶えず研究し、新しいトレーニング指導方法を考え選手と一緒に成長し、「選手」として自転車に乗れる時間は部員に負けたくないという気持ちでプレイングコーチとして指導を行っていききたい。



ホッケー競技を安全に行うために  
～高校からの初心者指導

ホッケー専門部  
石川県立羽松高等学校 倉脇寛支

## 1. はじめに

ホッケー競技は欧州を中心に世界ではメジャースポーツの1つとして挙げられていて、オリンピック種目でもある。しかし、日本ではマイナースポーツに甘んじているというのが現状である。基本的にホッケーはサッカーに非常によく似ている。1チームがゴールキーパー（以下 GK とする）1名とフィールドプレーヤー10名の合計11名で構成されており、コートのはさは55m×91.4mでサッカーより少し狭い程度である。試合時間はクォーター制（15分×4）で行われる。現在では公式ゲームは人工芝コートで行われるのが主流である。

ホッケーの最大の特性は、ゴール前方に14.63mのシューティングサークルがあり、そのエリア内で攻撃側がシュートしたボールがゴールに入れば得点となることである。また、そのシューティングサークルで守備側が反則をすると攻撃側にペナルティーコーナーが与えられる。そのため、そのエリア内での激しい攻防によるスティックの打撲骨折や接触プレーによる転倒、捻挫、擦過傷など、負傷者が出る場合がある。使用するスティックの長さは約1m、重さは約700gのカーボン素材で、ボールは硬質の素材でできているため、スティックもボールも非常に硬く、打たれたボールのスピードは脅威である。そのためルールにおいても、危険防止や安全は厳しく確保されているが、高度な判断力と、基本的な技術習得が強く要求される競技である。また、ジュニア経験がなく高校入学後に初めて経験する生徒も多く、技術が伴わないまま公式試合に出場するケースがあり、重大事故発生の可能性も高い。

## 2. 石川県の高校ホッケーの現状

### (1) 活動校数

男子) なし 女子) 金沢北陵高校 \*現在、1校のみが活動

### (2) 大会について

- ・県内大会は、対戦校がないため行われず
- ・県代表として 北信越高等学校体育大会  
北信越高等学校選抜大会  
国体北信越ブロック予選 に出場

### (3) 北信越ブロックの状況

- ・男女とも、各県において、1～2校が活動。
- ・富山県と福井県は、男女とも全国大会ベスト4以上が常連のハイレベルなチーム。  
技能にかなりの差がある中、ブロック大会が実施されている。

\*県内の中学校も、一昨年（令和3年）まで、富来中学校にホッケー部が設置されていたが、休部状態となり、現在は活動ゼロである。

## 3. 練習や、競技等で生じる事故について

- ・人工芝で行うために、手、肘、膝等に裂傷や擦過傷を追う危険性
- ・人工芝コートの表面が高温となる（夏季）
- ・硬質ボールによる打撲（シュートは時速100kmを超えるため、よけきれない可能性）



- ・スティックによる打撲
- ・ディフェンスに入る
- ・前傾姿勢によるボール操作からの、躓きによる転倒や、腰痛の危険性

#### 4. 事故防止のための安全対策について

- ・硬質のボールをスティック操作により奪い合うため、スティックの取り扱いについて、日頃から指導する。
- ・スティックのストロークについて、普段の練習において基本技術の習得と的確な自己判断力の育成に努める。
- ・日頃から、GKは完全な装備の着用、フィールドプレーヤーにはプロテクター（脛あて）、マウスガードの着用を必ず行う。
- ・シュートの速度は100kmを超えることから、日頃よりGK防具（ヘルメット、ボディプロテクター、レガード、キッカーズ、グローブ等）の老朽化や故障がないかの点検を怠らない。（定期点検）
- ・ペナルティーコーナー時の守備側の安全防具の着用。
- ・接触プレーが多いため、守備側の当たり方の指導の徹底（右肩ディフェンス）
- ・夏季において人工芝コートでプレーする場合は散水を行う。（熱中症対策を兼ねる）
- ・前傾姿勢での活動が多いため、腹筋、背筋を中心とした筋力アップと、バランスを考慮したトレーニングの実施。
- ・アンパイアは、試合中のけが人が出た場合、けがの症状を問わず試合をストップし、状況を確認する。（頭部、顔面へ打球、スティックが当たった場合は、一時退場をし様子を必ず見る）
- ・十分な休憩と水分補給を行う。夏場においては試合間の休息時間を多くとる等の工夫

#### 4. 初心者指導について

冒頭にも述べているように、ホッケー競技の特性から、高校からこの競技を始める生徒が本県においては多くみられる。硬質のボールとスティックを用いていきなり技術練習に入ると、「痛い、怖い」の恐怖心をもってしまってプレーが中途半端となり、けがに繋がる。また、不測の動作にもつながり、相手にけがをさせてしまう可能性もある。始めの練習の段階で、「痛い、怖い」の潜入感を持たせるのではなくそれを防ぐために、楽しく競技を行うことを目的に、安全性の高いプラスチック製のスティック（先端部はウレタン樹脂）を用いて安心してゲーム経験をさせることが有効的であると考えられる。ホッケーの特性を早く覚え、基本技術の習得や、危険性について体で覚えるということにもつながるといえる。危険の伴う競技ということで基本練習を徹底的に行うことは大切である。特に守備における体の使い方、スイングするスティックのよけ方などに時間を費やすことは重要である。本県においてはコーチングスタッフが少ないため、隣県の富山に出向き、マスターズチームとの試合をすることで、試合中にコーチングを行ってもらうなどの工夫を行っている。

#### 5. まとめ

ホッケー競技は、危険の伴うスポーツである。日頃から生徒も指導者も安全に対する意識を高く持つ必要がある。施設、用具の点検はもちろんのこと、選手の健康観察、チームの状態などもしっかりと観察していかなければ安全なホッケーはできないといえる。競技力の差が大きい競技でもあるため、対戦相手の指導者との交流も大切なことであり、競技の普及のためにも重大事故があってはならない。選手ファーストの指導は大切ですが、生徒の安全を一番に考え今後もホッケーの普及に努めていきたい。

持続可能な競技環境に向けて  
～ 高校生サッカー審判員育成を通して ～  
サッカー専門部  
石川県立金沢西高等学校  
教諭 上提奨悟

## 1 はじめに

本専門部は競技環境の拡大や補欠ゼロを目指し、春季大会の再構築や U18 リーグ戦を実施してきた。U18 リーグ戦は導入より 20 年弱を経ており、この間に人工芝ピッチの普及と相まって競技環境は一気に向上した。中学校部活動とジュニアユース年代クラブチームも同様に U15 リーグ戦を導入し、雨や降雪のため困難さを伴っていた競技活動が活発になり、競技環境を太平洋側地域同様にまで押し上げた。

こうした環境で競技力を高めた若者達は本県の各高校部活動で活躍し、冬の風物詩である全国高校サッカー一選手権大会では平成 26 年度の第 93 回大会に県勢初の全国優勝を星稜高校がもたらし、令和元年の福井国体では少年男子が準優勝した。関東、関西、東海、九州といった強豪地方に追いつけ追い越せと歯を食いしばって競技環境を整え、指導にあたった結果である。かつてを思えば隔世の感である。

このような好循環に見える競技環境ではあるが、高校生年代の公式試合は年間 400 試合にのぼり、少子化に端を発した学校の統廃合や部活動縮減による顧問の減少、なり手不足、働き方改革、休日を含む部活動指導時間の制限が起こっている。特に競技会運営という面では部顧問たちの善意の結集だけでは立ちゆかない部分が多くなってきた。なかでも身体的に発達した高校生競技者に短くて 60 分、長いもので 90 分間もついていかなければならない体力を持つ審判員確保は大きな課題となっている。

一般的に我々サッカー専門部の審判担当は割当業務に加え、部顧問へ審判指導を行い県内公式試合の主審を担える 3 級審判員資格取得を促している。しかし、上記の理由や将来的な最上位資格取得の土壌づくりを目的に、審判指導活動を高校生へと拡大することとなった。

本研究は 10 年ほどにわたる高校生への上級審判員資格取得の実践と課題を報告するものである。そのことによって本県の各競技専門部の持続可能な競技環境づくりの参考としていただきたい。

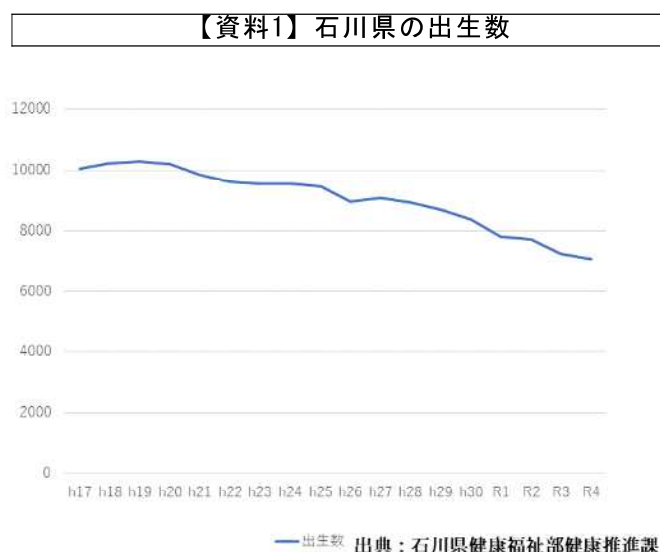
## 2 本県サッカー専門部を取り巻く状況

### (1) 少子化の波

少子高齢化が叫ばれ続けて久しいが、令和 4 年度の出生数を見るとより深刻な事態に陥っていることが伺える。少子化の波に加えて世界的な新型コロナウイルス拡大という見通しのつかない不安による「産み控え」が相まって出生数は戦後最低を更新したからだ。15 年後には「少子化」ならぬ「子供不在化」とでも言うべき事態が高校現場にやってくる。

この全国的な状況を石川県に当てはめ見てみると、令和 5 年現在、県内の高校生は約 3 万人である。それが昨年生まれた子どもたちが高校へ入学する 15 年後には約 2 万 4 千人となり、高校生年代は現在から 2 割減ることになる。【資料 1】参照

サッカー競技における県高校総体出場チーム数



で見ると平成 29 年度まで 42 チームが維持されてきたが現在 35 チーム（令和 4 年度県総体は合同チームでの出場を含み実質 41 校）である。仮にそこから出場校が 2 割減ったとして 29 チームの顧問たちで大会を運営していかなければならない。役員数の減少による運営能力の低下は容易に予想される。そのため、この十数年後の減少期を乗り越えるビジョンを持つことが持続可能な競技環境づくりに不可欠な視点であろう。

また【資料 2】のようにサッカー人気は陰りを見せており、高校生年代の競技登録者は減少している。サッカー部の数にはさほど影響しないだろうと楽観的な観測も可能である。しかしながら、部へ登録する者を確保するには「競技の魅力」を示し続けなければならない。そのためには競技でそれを体現する競技者と育成する指導者そして活躍する舞台（会場、審判、観客）の維持が不可欠だ。

本県では教員の若返りに伴ってサッカー部顧問陣も新陳代謝を起している。さらに言えば、競技を経験した多くの若手が指導者資格を取得して指導していることは好材料である。こうした指導者のもとで育成される生徒たちは幸せである。あとは審判という課題がある。この改善によって【資料 3】の減少傾向の歯止めやひいては持続可能な競技環境づくりのきっかけの一つとならないものか。

**(2) 試合数の増加**

県全体を見渡すと高校生のサッカー競技登録者数は縮小傾向にあるが、部員を多く抱える学校はリーグ戦に複数チームを送り出すこととなり、年間公式試合数自体は減少に至っていない。【資料 4】のグラフは県内の男子公式試合数の推移だが、ほぼ 400 試合を保っている。

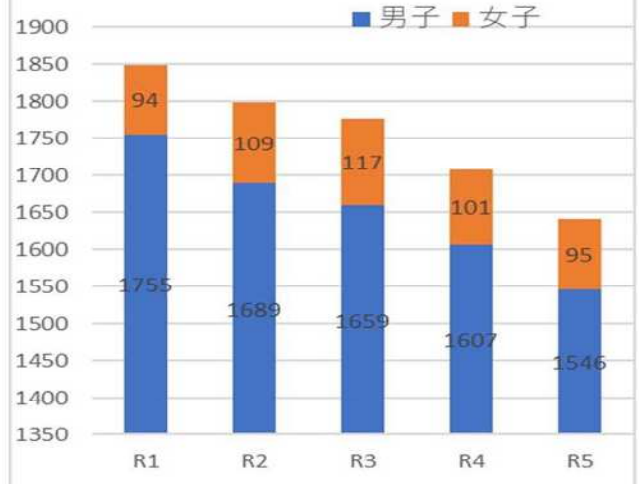
サッカーの試合は通常主審 1 名、副審 2 名、第 4 審判員 1 名の計 4 名で臨む。1 会場で 2 試合が行われたとしたら 4 校から計 8 名の審判が帯同されなければ試合は回らない。特に重要なのは主審である。このため各高校には毎年度当初主審が可能な 3 級資格以上を有する帯同審判員を最低 1 名依頼している。だが、登録高校の漸減に伴い顧問も減少し、高体連所属審判員も減少している。U18 リーグ戦では高校生副審を多用しているものの、主審を司れる者が足りないのが現状だ。そのため保護者や外部へ依頼し対応している高校もある。

このように試合環境の維持にやっとやっとなっており、審判員の供給が「質」「量」共に追いついていない。

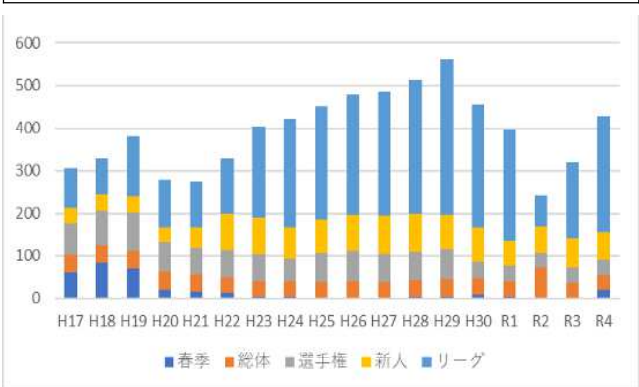
**【資料 2】 全国の高校生年代サッカー競技登録者数**



**【資料 3】 石川県高校生年代サッカー競技登録者数**



**【資料 4】 試合数の推移**



### 3 3級審判員資格（県内主審資格）育成実績と石川県らしさ

#### (1) 取得状況

U18 リーグ戦と新人戦の大会エントリーには生徒 4 級審判員の帯同を必須としている。そのため毎年 4 級審判員には事欠かない。この資格は県内公式試合の副審が出来る資格である。生徒に試合に出場し審判もさせるという負担の偏りをなくするため、多くのチームが全員取得や複数名取得の対応を行っている。

結果的に、11 月に行われる新人大会は優秀な生徒副審発掘の場となる。リーグ戦を通じ経験を積んだ生徒副審は競技の理解（オフサイドポジションにいてることによって罰せられる反則の見極め）や体力的にも申し分のない人材である。彼らには審判指導資格を持った者が指導したり、顧問を通じて 3 級昇級の声かけを行ったりする時がある。3 級審判員資格は県内公式試合の主審が出来る資格である。

実際に我々は【資料 5】のように多くの高校生 3 級審判資格昇級者を出すことができた。一時期は受講者を受け入れすぎ、審判指導者側が対応しきれなくなり、昇級スクールへの入会ハードルを上げる措置を取った。今から言えば追い風を受けた活動的な時期であった。

こうした早期育成が功を奏して、高校生であるにもかかわらずブロックレベルの公式試合の主審が可能な 2 級審判資格取得者を排出している。近年では 3 年連続排出しており、地方では珍しい事例とされている。

歴代サッカー専門部審判委員長を通じて行われた U18 審判員指導普及の実績は、平成 28 年～令和 4 年までの 7 年間で 32 名の 3 級審判員（女子 3 名含む）と 6 名の 2 級審判員（高卒までに取得 4 名、卒業直後に取得 2 名）排出に積み重ねられた。

#### (2) 専門部内の環境

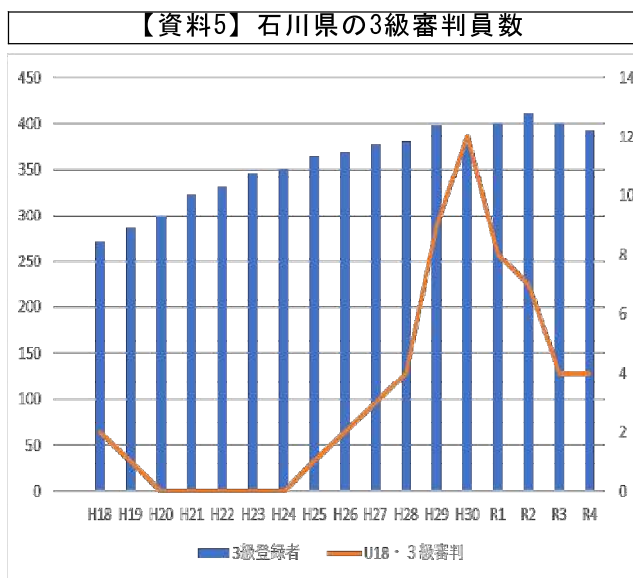
他競技の副審（線審）との最大の違いは、監視事項を走りながら判断し、主審が分かるようにフラッグで合図を送る点にある。昨冬のワールドカップ 2022 では「三苦の 1 ミリ」で有名になったが、地上空中を問わずボールが完全にラインを割ったかどうかを監視する。中でもオフサイドの反則は、ボールの出し手とそれを受ける競技者の位置関係を走りながら把握して判断しなければならない。見落としは得点に繋がるだけに責任が重い。

ミスジャッジをすると選手や観客から非難の声を投げかけられるのでかなりのストレスがあるのでは、と思われるだろう。実際高校生の副審が試合で旗を振るとそうしたことは起こりえる。ただ本県では皆でリーグ文化を築き上げてきた財産であろうか、多くの場合、当該チームの指導者が選手や保護者をコントロールして U18 審判員を守っている。副審のみならず、3 級昇級中や 3 級取得後の U18 審判が主審をした際にもチーム指導者が判定を受け入れ、自チームの選手を指導してくれている。

判定ミスがあったとしてもチームがそれを受け入れてくれているのは、長い間この事業を継続した中で形成されたものと考えられる。

もちろん、判定ミスをもっと終わらせて良いわけではなく、今後の若い審判員の成長のため、部指導者は時と場を変えて我々審判部にコメントを寄せてくれている。

さらに、審判員指導者資格を多くの顧問に取得してもらい、縦に長い石川県全域を網羅する体制も構築してきた。こうした指導環境もあって育成は軌道に乗っていた。



## 4 指導の実際

### (1) 年間スケジュール

年度当初の第1回顧問会議で趣旨説明と案内を行い、3級昇級スクールの募集をかける。そして1学期中に競技規則勉強会を兼ねた開校式を開く。その後、高校会場で練習試合を通じた実技指導を集中形式で行ったり単独形式で行ったりする。単独形式の場合は審判指導者が在籍する高校との練習試合を実施し指導を行うパターンが多い。夏期休業中は場合によっては練習試合や他種別の会場へ保護者承諾のもとで審判をさせ指導を行うこともある。こうしたことを積み重ね、新人大会時に2試合程度主審をさせ技能審査を行う。体力試験は新人大会期間中に設定し、実技試験合格者は後日筆記試験を実施する。これら3種類の試験に合格した者は年度末に昇級手続きに入る。

また合格した者に対してのフォローアップとして、次年度公式戦でアドバイスをする。さらに希望すれば小学生の大会へ審判員として派遣している。小学生の試合は選手が素直でコントロールしやすく経験を積みやすい。また小学生の保護者審判よりも審判技能や走力が遙かに優れているため重宝される。そのように扱われて評価されるとU18審判員も自己肯定感が高まりやすい。こうしたサイクルを経て、上級審判資格を目指す者が現れる。

### (2) 指導内容

3級昇級中や3級取得者、2級昇級中、どのカテゴリーであっても基本的な指導形式は変わらない。〔トレーニング ⇒ 試合 ⇒ 振り返り ⇒ トレーニング〕である。指導するときは重箱の隅をつつくのではなく、出来ていること、優れていることを最初に指摘し、足りないところに気づかせ、次の目標や課題を明確にさせる対話形式を心がけている。

こうした指導方法については、我々も先輩方から学び、シンプル・ショート・クリアを軸に行うようにしている。高校生にとって選手をすること以上に審判をするモチベーションの持続は難しい。だが、メンタルを維持させることも含めて審判指導は教科指導に通じる点があり、興味関心を持続させることなど教員としてのスキルが大いに役立つ。

成長すれば次のステージへ進み強度の高い試合を吹く。そこでの実技実践は緊張が強られるが、難しい判定を行えたり、判定を行うための良いポジションを取れたり、負傷した選手の安全を確保できたりしたときなどは指導者冥利に尽きる。勝利や受験合格とはひと味違う運営者としての達成感を享受できるからだ。

## 5 新型コロナウイルス感染症と高校生

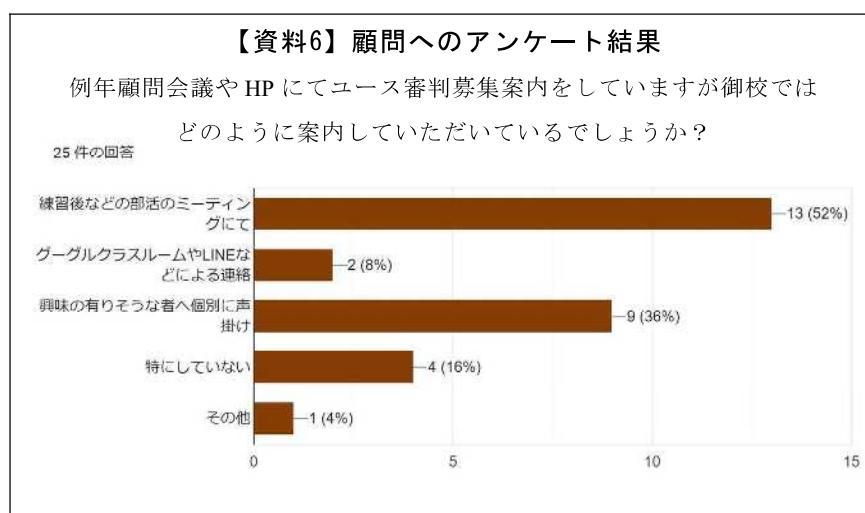
### (1) 必要最小限の課外活動

新型コロナウイルス感染症が拡大したのちも部顧問たちは主審のできる生徒がいればチームや将来的な競技会運営に役立つ本活動を前向きに捉え、【資料6】のように各校生徒へ働きかけてくれている。また、【資料7】からもU18審判員への前向きな思いが伝わってくる。

しかし、【資料8】の3級昇級スクールの断った本校生徒たちのコ

メントにも見られるように、新型コロナウイルス感染症は高校生の部活動に対する考えを大きく変えたと言えよう。

高校生は課外活動における時間的拘束を最小限に抑え、「無理をしない」「人と接触する機会を減らす」「心身のリフレッシュを重視する」などといったマインドに傾いているように見える。そのため部活動において



レギュラー獲得や勝利、身体能力の向上以外の目標を持ちにくくなった。

### (2) 身近なロールモデルの不在

加えて、令和2年度から令和4年度の間、大会中断や縮小期間が続いたことも審判指導に大きな影を落とした。【資料4】のように試合を通じた他校との交流が激減したこともあって、U18 審判員の主審を間近に目にする機会がなくなる。必然的に認知度が下がり、挑戦しようと思う者がいなくなったからだ。

振り返ると令和2年度には交流戦という形で試合が行われたため U18 審判員派遣や活動がほとんど無い状態となった。令和3年は U18 審判員の健康を留意して活動していたため小規模に留まった。令和4年には大会が原状回復に向かって大きく動き出したが、U18 審判員の3級主審を目の当たりにする機会はほとんど無かったと断言している。

審判技術が上手かろうが下手であろうが、これまでその存在を高校生たちが目の当たりにしていたことはとても大きい。後に続く者が自然と出やすい環境にあったのだ。しかしながら近年はそうではなく、続く者が現れなくなった。ロールモデルの不在がこうも大きく響くとは思ってもいなかった。コロナ禍で失った蓄積は非常に多い。

「部員数がひっ迫していることもあり、審判をしたいという生徒が現れなかった。」

「チームに希望者がいなかった。いたら挑戦させたい」

「3級昇格に挑んだ実績はありませんが、その意思を持った部員が出て来れば尊重したいと考えています。」

「部は例年人員不足が顕著なため、審判員活動とプレーヤー活動を調整・相談しながらになると予想されます。」

【資料7】 U18審判育成に対して御校はどのようなスタンスでしたか。(抜粋)

2年生から：(部が修了後)塾へいく時間が欲しい。：レギュラー取るために時間を使えと親に言われた。：いざ授業が始まると勉強(理系)について行けない。：部活で精一杯。：練習以外に土日に呼び出されるのが時間的にきつい。

1年生から：副審ならいいけど主審で責任持ちたくない。：色々言われるのが怖い。

【資料8】興味を示しつつ断られた際の返事

## 6 新たな種まき

### (1) 隗より始めよ ～ロールモデルの存在が翌年の増員を招くと信じて～

こうした状況を勘案し、各課題に対処療法的に対策を講じることとした。そのことで U18 審判員の育成を正常化に向ける足がかりとすることにした。中でも U18 審判員育成の火を絶やさないため、新規昇級希望者の掘り起こしを重視することにした。先の章でも上げたようにロールモデルの不在は何としても避けたい。

先述のようにコロナ以後の高校生のマインドは極力部活動の幅を広げず無理をしないという安全志向である。そのため令和5年度当初、これまで通りの募集方法では1次締め切りまでに1人しか得ることが出来なかった(その後辞退)。

私自身も勤務校で年度始まりと同時に1・2年生部員全体へ働きかけたり、審判適性の高い生徒の一本釣りを図るも希望者を得ることが出来なかった(一時は興味を示すも親の反対に遭う)。

夏休みが迫り、日に日に焦りを生じることとなった。このままではロールモデルの不在が続き、翌年も希望者不在を招くことが濃厚になるからだ。

### (2) 部活動内で完結させる

そこでヒアリングで得られた【資料8】のコメントを元に、指導対象の生徒への取り決め事項を定め、かつて断られた生徒の一部に再度挑戦を促した。取り決め事項は、①指導は通常部活動の練習時間内に留める、②審判指導内容に競技技術向上の糸口も示す、③出来るだけ金銭的負担はかけない、④紅白戦ならばフルでさせず4分の1程度の時間に短縮し指導は「シンプル・ショート・クリア」を心がけ時間的負担をかけない、⑤審判技術だけでなく競技技術や心身の発達にも目を配り声かけを行う、というものだ。

これらを事前に生徒に伝え、1年生1人、2年生1人の参加をようやく得て、細々とだが夏休みから指導を始めることができた。

### (3) サッカー未経験者・部活未加入者への呼びかけ

大会会場で U18 審判を目にしにしないことは大きなマイナスであることは先にも述べた。そこで一人でも多くのユース審判が大会会場で散見される状況を作ることが重要と考えられた。一度コロナで途切れた「0」の状況を「1」に復活させるには、兎にも角にも「U18 審判員の存在」を大会会場で示すことが大事である。あの手この手で勤務校の生徒を勧誘しアピールした。

随分無理な広報だが、どこで実を結ぶか知れないと思い行った。その取り組みを紹介すると、①学年集会での担任団自己紹介で宣伝、②クラス掲示のポスター類にさりげなく混ぜて掲示、③個人 PC の壁紙に添付、④放課後クラス生徒にオフサイドクイズを実施、⑤審判エクササイズ会の実施、⑥審判道具紹介の会、⑦サッカー経験者でサッカー部へ入らなかった者への声かけ、などであった。

こうした種まきが功を奏したのか、夏期休業中に私が笛を吹く小学生の練習試合の副審を女子生徒 2 人が経験してくれることとなった（スポーツ保険に加入し実施）。当人達は未知の競技を体験したように楽しんでくれた。「サッカー」の「審判」という付属物感覚から脱することも一つかと思われた。

### (4) U18 審判育成活動の再始動

こうして、コロナ禍前のように審判育成活動を再始動した。しかしそれはあくまでも端緒にすぎず、本格的なものではない。9 月 10 月のスポーツのハイシーズンで指導を積み重ね、11 月の新人大会での昇級実技審査合格へと漕ぎつけたい。そして次年度は彼らがユース審判のロールモデルとなって、後輩や他校生から昇級希望者が増えることを願ってやまない。

## 7 まとめ

何のための審判員育成か。

私自身は高校スポーツの現場で審判をすること自体に魅力を感じる者である。貴重な青春を賭して運動部活動に鼓動を轟かせる選手たち、その選手たちの思いと力を束ね情熱と時間を捧げる監督や顧問、見守る保護者や関係者、そうした高校スポーツを楽しむ関わる人々のために公平に試合を判定し選手の安全を配慮し試合全体をコントロールする。審判員は競技の一部であり同時に魅力を引き出す存在である。言い換えると試合を成立させる競技の第 1 環境である。

ただ、今後中学校の部活動の段階的な地域移行が進み、少子化の影響もさらに深まっていくなか、教員顧問数も減っていくことになる。専門部を構成する人員も減少していき、競技を支える人員の確保が難しくなるだろう。そのため将来的な大会運営者として U18 審判員を継続して育成していきたい。

審判員という裏方に回る役割を高校生に促していくことは難しいが、そうしたことにやりがいを感じる者や適正を持つ者は必ずいる。そうした若い人材を掘り起こし、継続して排出していくことが、持続可能な競技環境づくりに繋がるものと考えられる。

コロナ禍によって U18 審判育成の好循環が途絶えてしまった本実践であった。だがそれにより指導方法の改善や審判に取り組んでくれる高校生の思い、普及活動の必要性といったことに気づかされた。もちろんこうした取組は教員の働き方に負荷をかけていくとも予想される。だが人的な余力を残す今のうちにこの活動を軌道に載せなおせば、将来の大会運営負担を随分と軽減できるであろう。

教員が増員されない以上、持続可能な競技環境づくりの鍵を握るのは選手たち自身による運営参画である。大学スポーツのように生徒から競技役員（特に高いレベルの審判員）を出し、競技運営を支える力を高めることがポイントとなるであろう。こうした本専門部の実践が他専門部の持続可能な競技運営のヒントになれば幸甚である。

### 第17回県研究大会参加者名簿

|   | 役 職                      | 氏 名   | 所 属        |
|---|--------------------------|-------|------------|
| 1 | 石川県高等学校体育連盟会長            | 梅本 浩照 | 金沢桜丘高等学校校長 |
| 2 | 石川県高等学校体育連盟副会長           | 河内聡一郎 | 寺井高等学校校長   |
| 3 | 石川県高等学校体育連盟副会長(調査研究部長)   | 釜田 渉  | 津幡高等学校校長   |
| 4 | 石川県高等学校体育連盟副会長           | 島崎 康一 | 穴水高等学校校長   |
| 5 | 石川県教育委員会保健体育課長(高体連参与)    | 瀬戸 博邦 |            |
| 6 | 石川県高等学校体育連盟理事長           | 糀 高晴  | 金沢桜丘高等学校   |
| 7 | 石川県教育委員会保健体育課指導主事(指導助言者) | 宮西 良岳 |            |

|    | 学 校 名     | 参加者氏名(下線:発表者、ゴシック:調査研究委員) |            |       |       |
|----|-----------|---------------------------|------------|-------|-------|
| 1  | 大 聖 寺 実   | 辻 拓弥                      |            |       |       |
| 2  | 加 賀 聖 城   | 山上 茂信                     |            |       |       |
| 3  | 大 聖 寺     | 達 光洋                      |            |       |       |
| 4  | 加 賀       | 今西 聡                      | 本田 雅之      |       |       |
| 5  | 小 松 商 業   | 田村 智成                     | 山作 直弘      |       |       |
| 6  | 小 松 工 業   | 小町 昂史                     |            |       |       |
| 7  | 小 松 市 立   | 古橋 健太                     |            |       |       |
| 8  | 小 松       | 山田 潤                      | 荒川 富夫      |       |       |
| 9  | 小 松 北     | 坂下 康政                     |            |       |       |
| 10 | 小 松 明 峰   | 横野祐太郎                     | 野田 誠一      | 安田 誠二 |       |
| 11 | 寺 井       | 西村 剛                      |            |       |       |
| 12 | 鶴 来       | 齊藤 由華                     | 山田 純文      |       |       |
| 13 | 松 任       | 早川 由規                     |            |       |       |
| 14 | 翠 星       | 芝田 公美                     | 根石 修       |       |       |
| 15 | 明 倫       | 岡村 武志                     |            |       |       |
| 16 | 金 沢 錦 丘   | 高田 満                      |            |       |       |
| 17 | 金 沢 泉 丘   | 吉見 拓也                     | 木村 哲也      | 青木 崇  |       |
| 18 | 金 沢 二 水   | 和田 真                      |            |       |       |
| 19 | 金 沢 中 央   | 平塚 浩一                     |            |       |       |
| 20 | 金 沢 伏 見   | 鴨田 祐介                     | 今川 徹       |       |       |
| 21 | 辰 巳 丘     | 山口 淳史                     | 田村 達       |       |       |
| 22 | 金 沢 商 業   | 竹本 茜                      | 北村 由美      |       |       |
| 23 | 県 立 工 業   | 生田 佳澄                     |            |       |       |
| 24 | 金 沢 桜 丘   | 千石 友規                     | 竹中 二郎      |       |       |
| 25 | 金 市 工 業   | 北橋 純子                     | 増田 英樹      | 中野 克也 |       |
| 26 | 金 沢 西     | 中村 兼希                     | (発表者)上提 翠悟 |       |       |
| 27 | 金 沢 北 陵   | 石田 大介                     |            |       |       |
| 28 | 金 沢 向 陽   | 山首 一恵                     | 中川 義之      |       |       |
| 29 | 内 灘       | (発表者)片岡 信忠                |            |       |       |
| 30 | 津 幡       | 宮村 徹                      | 河村 聡       | 井谷 亜矢 | 山下 理貴 |
| 31 | 宝 達       | 油野 知加                     |            |       |       |
| 32 | 羽 咋       | 中越 早代                     |            |       |       |
| 33 | 羽 松       | (発表者)倉脇 寛支                |            |       |       |
| 34 | 羽 咋 工 業   | 田畑 武志                     | 文後 豪介      |       |       |
| 35 | 志 賀       | 稲田 浩平                     |            |       |       |
| 36 | 鹿 西       | 竹藤 景介                     |            |       |       |
| 37 | 七 尾 東     | 岡田 英典                     |            |       |       |
| 38 | 七 尾       | 中西 外幸                     |            |       |       |
| 39 | 七 尾 城 北   | 土佐 厚郎                     |            |       |       |
| 40 | 田 鶴 浜     | 赤穂 真                      |            |       |       |
| 41 | 穴 水       | 室谷 貴大                     |            |       |       |
| 42 | 門 前       | 羽部 康徳                     |            |       |       |
| 43 | 輪 島       | 山下 友子                     |            |       |       |
| 44 | 能 登       | 岩村 律                      |            |       |       |
| 45 | 飯 田       | 米澤 正子                     |            |       |       |
| 46 | ろ う 学 校   | 細川 芳範                     |            |       |       |
| 47 | 明 和 特 支   | 竹内 順一                     |            |       |       |
| 48 | いしかわ特支    | 西村 幸祐                     |            |       |       |
| 49 | 金 大 附 特 支 | 野口 勇輝                     |            |       |       |
| 50 | 小 松 特 支   | 宮下 翼                      |            |       |       |
| 51 | 七 尾 特 支   | 引木 聖                      |            |       |       |
| 52 | 金 大 附 属   | 真喜志みどり                    |            |       |       |
| 53 | 小 松 大 谷   | 西田 祥平                     |            |       |       |
| 54 | 北 陸 学 院   | 渡辺 大輔                     |            |       |       |
| 55 | 遊 学 館     | 吉田 昌史                     |            |       |       |
| 56 | 金 沢       | 波佐間美樹                     | 北井 鉄明      | 小檜山保雄 |       |
| 57 | 金 沢 龍 谷   | 星野 仁孝                     |            |       |       |
| 58 | 星 稜       | 安達 裕子                     | 西川 明大      | 矢後慎太郎 | 櫻井 亮士 |
| 59 | 金 学 大 附   | 坂本 裕平                     | 横山 康博      | 徳田 哲雄 |       |
| 60 | 鵬 学 園     | 高柴 礼奈                     |            |       |       |
| 61 | 航 空 石 川   | 橋本 昌和                     | 竹中 晴宣      |       |       |



